五二年の異変から

第五・六回中四国女子学生剣道優勝大会連続優勝

徳島大学OG
稲月　幸

昭和五二年春、徳島大学剣道部にちょっとした異変がありました。それまで女子部員は年二名程でしたが、この年は男子四名に対して女子が八名も入部したのです。八名のうち経験者は六名で、その出身地は四国のみならず北陸、関西、九州と様々でした。それだけに高校で身につけてきた剣道は各々個性がありました。その個性ゆえに苦しむこともありましたが、仲間を通して自分を見直し、お互いに切磋琢磨することができたように思います。

突然女子部員が増えて先輩方には何かと迷惑をかけたと思いますが、暖かいご指導を受けることができました。県立武道館では、顧問の堀江先生、当時の館長の岸先生をはじめ、県警の先輩方や四国女子大の妹尾先輩など数多くの方々にご指導していただきました。それぞれに忘れられない思い出があります。県警の先輩方の剣道にはしばしば見とれてしまいました。

おだやかでとても優しいお顔の堀江先生ですが、私にとっては先生との稽古は一番緊張感の張りつめるひとときでした。試合の時、私は、岸先生からお聞きした「あがらず、あせらず、あなどらず」という言葉を繰り返し唱え、不思議なほど平常心をとりもどすことができました。私の心臓には「剣山が生えているようだ」とある先輩からよく言われていましたが、私にはこういう魔法の言葉があったのです。

そしてわが剣道部になくてはならないのが部長の馬場先生です。先生はいつも部員みんなの心の依りどころで、詳しくは申せませんが、私も大変お世話になりました。このように多くの人々に支えられて、徳大女子剣道部は昭和五三年、念願の中四国団体優勝を果たしました。

松村・上田先輩を中心としたメンバーも、控えの選手も、まさか優勝できるとは思っていなかったので、一勝一勝をみんなで大喜びしながら夢のように勝ち上がっていったことを思い出します。

そして真価を問われる翌五四年には、苦しみながらも連続優勝することができました。今改めてその頃の徳大女子剣道部を支えてくださった皆様に感謝いたします。

現在の徳大剣道部は、教育学部が廃止されたこともあって女子部員はかなり減ってしまったようです。OGにとってはとても寂しい事ではありますが、これからも徳大剣道部の活躍を心から期待しています。

自信を勝利の道へ

第一八・一九・二〇回中四国女子学生剣道優勝大会三連続優勝

聖カタリナ女子大学
平成5年卒
赤坂美智代

聖カタリナ女子大学剣道部は、昭和四七年同好会として活動が始まり、翌年剣道部を結成、約二二年来の歴史ある女子大学剣道部です。

平成元年、ちょうど私が入学した年の夏、中四国女子学生剣道大会において、初の団体優勝を果たしました。その後、平成三・四・五年と三年連続優勝の成績を残し、女子大初の快挙をあげました。

以上のような好成績は、私たちに惜しみなく時間を費やし、熱心なご指導を注いで下さった木原資裕先生のお力の偉大さを物語っていると思います。木原先生は、厳しさの中にも温かみのあるお人柄で、稽古に対する意欲をかき立ててくださる、そんな先生であったと私は記憶しています。

私たちは、女性だけの慣れ合いの稽古にならぬよう、木原先生のご指導はもちろんのこと武道館の朝稽古や、あらゆる大学の合同合宿に参加させていただき、お互い心と技を磨き合い、向上して行きました。

苦しい稽古を経て、自分たちにどんどん力がついていくことを認識した時、「更に強いチームにな

きらめきを放つ時代だった

香川大学　昭和六〇年卒　須和（旧姓安部）千鶴

第一〇・一一回中四国女子学生剣道優勝大会連続優勝

現在、育児（五才・三才・一才の男児）に忙殺される毎日を送っている私にとって、香川大学時代の剣道部の思い出は、クリスタルの輝きにも似たきらめきを放っているのです。子供達が寝静まった深夜、夫（香大剣道部の同期）と繰り言のように思い出しては、大笑いをしています。

学生女子団体戦の全国大会が始まったのは、私が二年生の時だったと思います。団体戦が五人制となり、メンバーをそろえるのに四苦八苦したように記憶しています。当時、広島大学・島根大学がメンバーがそろい、強くて、我が香川大学などは全国大会に行けるなんて思いもよらなかったのです。第一回大会、まさに〝たなからぼたもち〟で三位。三位になったとたん、メンバー全員びっくりしたものです。当時、三年生一名、二年生二名、一年生三名（うち初心者二名）だったのですから。

そして次の年、強力なメンバー加入。高校時代、名を馳せた三人息子（植田師範が後にそう呼んでおりました。）の登場です。江草・倉知・合田。この三人のなんと明るいこと。実力あり、剣道大好き少女を地でいっておりました。全くの新人類達でした。そして、軽いのりで優勝。この優勝は、当然のごとくやってきました。三年生二名（中四国個人優勝の私、中四国最優秀選手の田中）二年生一名（四国インカレ準優勝の石塚）そして、かの一年生三名、穴のない五人戦力というのは、後にも先にも、この大会だけでした。しかし、全国大会の壁は厚かったのでした。

学生最後の年。私は、教員採用試験のため中四国大会には欠席。今でも、これは心残りで仕方がないのですが。しかしながら、我が香川大学の勢いは、すばらしいものでした。同期の田中を中心に、二年連続優勝の偉業を達成したのです。その知らせを受け、どんなにうれしかったことでしょう。全国大会でも日本女子体育大学を破っての堂々、ベスト16入り。私は大将として、有終の美を飾ることができました。

なんと、しあわせな学生時代だったのでしょう。確かに、日々の稽古、合宿は、今思い出しても、ぞっとするほどいやなものでしたが、心・技・体の鍛練の日々をより充実したものにし、高めてくれたのが中四国大会でした。その思い出は、現在の私を支える大きな力になっています。

学生時代にしか経験できない数々の思い出、それを支援し続けてくださっている方々に深く感謝しております。

ろう」と皆が一致団結するようになりました。大会の直前には三日間もかけて部内戦を行なったりして、試合に備え、万全を期したものでした。しかしそれは、勝つためだけのものではなく、稽古の成果を見極めるためでもありましたし、その中で自然に出た見事な技を忘れぬように記録したり、反省点を見付けて次のステップに進むための土台にすることが一つの狙いでもありました。

他の大学に比べ、女子大というハンディはありましたが、いつも自信を持って稽古を積んできたからこそ、優勝の道が開けたのだと信じています。

いつもじっと私たちの成長を見守り続けてくださった木原先生をはじめ、ご指導いただいた諸先生方、剣道部の発展に努めてこられた先輩方に、心から深く感謝いたします。

そして今後も、今までの伝統を受け継いで、更に素晴らしい歴史を刻んでいただけるであろうことを期待し、いつまでも母校の発展を祈り続けます。

いろいろありました

回顧

第一回中四国大会優勝
高知大学剣道部昭和三一年卒業
橋田　速生

昭和三〇年一一月一三日。それが第一回中四国学生剣道大会です。全日本学生剣道選手権大会への予選も兼ねていました。

昭和二七年、私が入学をした年に創設した高知大学剣道部でしたがスタートは〝しない競技〟からでした。

竹を一六本に割って袋をかぶせた竹刀で時間内に数多く打突する競技でした。

翌年には剣道となりましたが、剣道部は予算もなく、部員も団体戦のオーダーがかろうじて組める数しかおらず、大会当日も剣道具は竹胴あり赤胴ありで、袴などもまちまちの姿でした。

しかし松山商大は揃いの道具・稽古着で試合直前の円陣をつくっての準備運動に私達は圧倒され、勝負などあきらめの表情でした。が、本当に幸運に恵まれて団体優勝し、おまけに私は個人優勝もする事ができたのです。

岡山大学（準優勝）と共に中四国の代表として、東京での第三回全日本学生剣道選手権大会への出場権を獲得したのです。

実はその時の個人優勝の副賞として大小の木刀を頂戴したのですが、それが大会当日に間に合わず、一二月四日に行なわれた全日本学生剣道大会への行きがけに、宇高連絡船をおりた宇野で、事務局の方からいただいた事を覚えております。今もその木刀は大事に使わせていただいております。

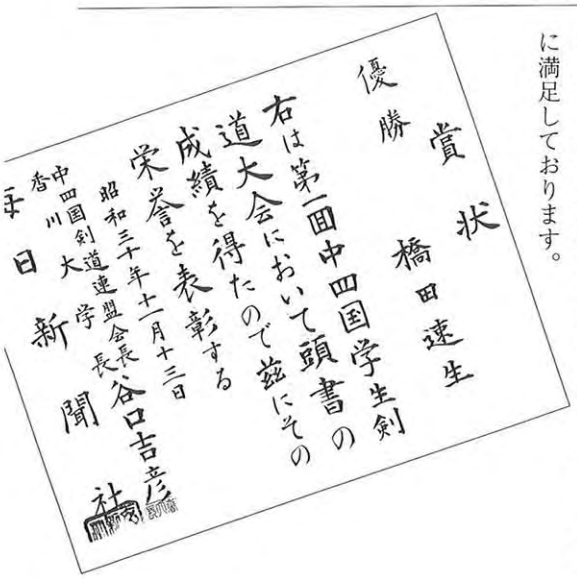
記録も残してありますが、個人戦でお相手した剣士も列記しておきたいと思います。

一回戦が引頭（香川大）、そして山地（高知大）、山田（岡山大）、高橋（高知大）、優勝戦は松尾（香川大）でした。

あわせて学生時代をふりかえってみますと、予算がないので大会参加には米持参でお寺へとめてもらったり、又昭和二九年にも四国代表で第二回全日本学生剣道選手権大会に出場できたのですが、鈍行の夜行列車で朝大阪につき、前日の残りのカレーライスの朝食にありついて大会に参加した事でした。

〝連盟四〇年の歩み〟本当に感無量なものがあります。

中四国大会の優勝が、今日まで剣道を捨てさせる事なく歩んできました。今は地元で少年剣道二〇年目を迎えようとしておりますし、平成六年三月高等学校長を最後に定年退職しましたが、一〇年間高知県高等学校体育連盟剣道部長もさせていただいた事に満足しております。



優勝賞状

橋田速生

右は第一回中四国学生剣道大会において頭書の成績を得たので茲にその栄誉を表彰する

昭和三十年十一月十三日

中四国剣道連盟会長　谷口吉彦

香川大学

新聞社

思い出のアルバム

第五回全日本学生剣道大会ベストエイト
岡山大学剣道部OB
原田　忠弘

本誌の執筆依頼を受け、久し振りに書棚からアルバムを出して見ました。第一回中四国学生剣道大会は昭和三〇年に高松市で開催され、高知大学が優勝、岡山大学が二位だったと聞いています。第二回大会は翌三一年、岡山市で開催され、自分も出席したため新聞の切り抜きや当時の写真がたくさん残っています。それらを眺めていると懐かしい思い出が次々と蘇ってきました。中堅で公式戦初出場、心技ともに未熟でしたが、チームメイトの活躍で団体優勝し、第四回全日本学生剣道大会（於大阪府立体育館、五人制）に出場しました。しかし、一回戦でシード校の東京拓殖大学と対戦し、二対三で涙をのみました。

翌三二年、第三回中四国学生剣道大会では大将で出場、団体戦で連続優勝し、第五回全日本学生剣道大会（於東京都立体育館、このときより七人制）に出場しました。一回戦不戦勝の後、二回戦の立教大学戦は大将戦になり四対三で辛勝、続いて東京大学には五対二で勝ち、ベストエイトに勝ち残りました。準々決勝では法政大学に〇対七で完敗しましたが、今は亡き小橋師範から「田舎の野武士軍団がよくやったよ」と誉めていただいたのを覚えています。

当時の岡大の稽古場は、道場とは名ばかりの兵舎に使っていたバラックで、一年生は踏み抜いた床板の修理を毎日の日課にしていました。一度に何か所も穴があき、仕方なく雑草の繁る空地で稽古をしたこともありました。そのときの写真も残っていますが、まさに野武士軍団でありました。従って、スプリングのきいた大阪府立体育館や東京都立体育館での試合前の稽古では自分の技量が上がったような錯覚をおぼえたものでした。

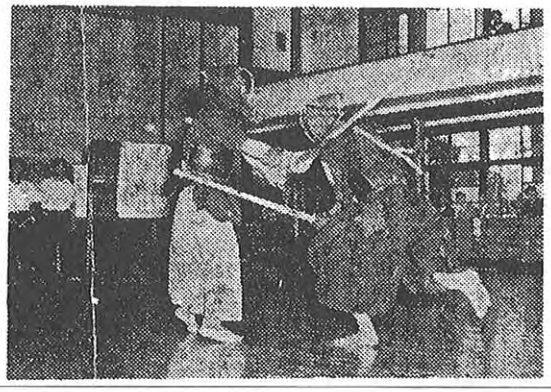
夏の合宿練習は、はだか祭りで有名な西大寺観音院の御好意により、当所に宿泊させていただき西大寺武徳殿で稽古をしました。朝はしじみの味噌汁ときまっていましたので、炊事当番になると、午後の稽古が免除され、近くの吉井川でしじみを採って来るのです。こっそり水泳もできるのでうれしかったものですが、調子にのって沖に出たとき、片足がけいれんして死ぬ思いをしたこともありました。また、合宿中は禁酒・禁煙を実行していましたが、就寝前に蚊帳の中でおならを燃やす実験をしたりする者がいて、臭い中で笑いころげたこともありました。仏様も苦笑いなさっていたことでしょう。

しかし、立つ鳥後を濁さずと、退所の折は便所掃除を徹底的にやりました。当時は水洗便所でありませんでしたが、便器を雑巾で磨くのです。部長の浜崎先生が率先してなさったお姿がまぶたに焼きついています。すばらしい先生方や友との出会いを心より感謝いたしている次第です。

岡大、初優勝飾る

中四国学生剣道選手権

第一回中、四国学生剣道選手権大会兼全日本大会予選は十六日岡山市富田町、後楽道場で団体と個人両試合が行われた。岡山大学は圧倒的な強味を発揮団体戦で初優勝した。また個人戦でも小沢選手（岡山大）が強襲選手を倒し、初の栄冠を獲得した。



◇団体決勝リーグ

岡山大 4-1 香川大
松山商大 3-2 鳥取大
香川大 4-1 鳥取大
岡山大 3-2 松山商大
松山商大 3-2 香川大
▽順位＝①岡山大3勝11点②松山商大2勝1敗8点③香川大1勝2敗7点④鳥取大3敗4点

◇個人決勝トーナメント

▽一回戦
水田メ・メ（岡大）―平松（松商大）
小沢コ・メ（岡大）―井村（松商大）
玉光メ・メ（岡大）―三木（香川大）
三宅メ・ド（岡大）―原田（香川）
江藤メ・メ（松商大）―沼田（岡大）
原田コ・コ（岡大）―吉末（鳥取大）

▽二回戦
水田メ・メ（香川大）―藤本（香川大）
小沢コ・コ・メ（岡大）―青野（松商大）
玉光コ・コ（岡大）―引頭（香川大）
三宅メ・メ（岡大）―江藤（松商大）
原田メ・コ（岡大）―福家（香川大）
白神コ・メ（香川大）―久保田（岡山大）

▽準々決勝
水田コ・コ・メ（岡大）―鈴木（鳥取大）
小沢コ・ド（岡大）―玉光（岡大）
中尾メ・メ（松山商大）―三宅（岡大）
白神メ・メ・メ（香川大）―原田（岡大）

▽決勝
小沢コ・メ・メ（岡大）―白神（香川大）

（写真は中堅原田＝岡山大、右＝対中堅中尾＝松商大＝の試戦）

（山陽新聞昭和31年9月17日（月）朝刊）

第一、二回大会の頃

香川大学昭和三三年卒業
三木（みき）　四行（しこう）

先ずは四〇周年おめでとうございます。

御指名で原稿の依頼を頂戴いたしましたが、何分四〇年も昔のことで、これといった記憶がほとんどありませんが思い出すまま。

当時中四国間という長距離の試合遠征は、すべて石炭焚きの蒸気機関車牽引の鈍行列車（各駅停車）を利用していました。特に夏季の移動は暑さと煤煙で大変でした。トンネルにさしかかるたびに窓の開閉に大騒ぎでした。

大会参加に際しては、試合前日出発。目的地に着くと旅館に荷物を預け、翌日の試合のために会場の下見、その足で名所旧跡の見学。

一、二回大会は参加校も僅かでしたので、終了も午後の早い時刻でした。帰途の夜行列車迄の時間は再び前日行けなかった場所を観光。交通の事情は非常に悪く、特に夜行列車の混雑はひどいものでした。そこで三名程の部員が帰路と反対方向へ三～四駅逆行し、全員の座席を確保して出発駅迄戻って来る、というようなことをしていました。

我々の国立校は学生数も少なく、学友会よりの部費も僅少でした。対外試合の時には選手全員の黒胴を揃えるのに非常に苦労しました。もちろん稽古着・袴はてんでばらばら、そんななかで松山商大の上下純白の揃いに目を見張ったものでした。

当時は戦後の剣道禁止解除より日も浅く、高校での剣道経験者は非常に少なく、経験者はほとんど有名私学へ流れ、地方国立校へはまいりませんでした。当校（香大）の場合、私と同期の部員（三三年卒）九名中、撓競技経験者一名のみ、二年後輩に初段一名がやっと入部しました。他の部員は全て大学入学後剣道部に入部し、基本から始めた者ばかりです。

当時の香川大学の実力を今振り返って見ますと、現在少年剣道を小学校三～四年頃から始め、引き続き剣道部に入部している中学上級生程度の力ではなかったかと思います。

中四国第一回大会の頃、マジックインキが出現しました。もちろん現在のように多種多様な種類ではなく、ガラス容器のものだけでしたが、それまでの筆と墨汁による掲示にとって代わり大変便利になりました。それにしてもガラス容器のデザインは当時のまま、四〇年もの間変わりもなく、昨今珍しく息の長い商品だなと妙なところで感心したりしています。

最後に貴連盟の今後一層のご発展をお祈りして、この稿を終わります。

三三年前の中四大会

元鳥取大学剣道部部長
大谷栄之助

今を去る三三年前、昭和三七年五月二〇日（日）第六回中四国学生剣道大会の主管大学となり、当時の鳥取市体育館を会場として、九大学約七〇名の選手を迎えて開催しました。しかも、団体・個人ともに初優勝した事は、当時の部長として選手部員一同最高の栄誉を祝福し、欣喜雀躍したことは、今なお若き日の良い想い出として深く脳裏に残っています。

当時、鳥取大学教育・農の両学部は鳥取市内に、医学部は米子市にと分散、しかも教・農の両学部はキャンパスが離れていたので総合的練習など極めて困難であり、師範先生方のご苦労は大変であった事と想像できます。小輩としては専ら大学事務局、殊に学生部と折衝し、道場・用具などの環境整備にいささかの努力、その充実に気をつかい奔走した事が想起されます。

「剣は人の道なり」を目標とし、人間形成の課外活動の一環として、部員一同が一致和協、練習一筋に精進した結果、栄冠をかち得たものと痛感し、夫々の人生経験に大いに役立っていることと思います。

第六回大会の模様については、翌五月二一日の毎日新聞鳥取版に次の評が載っていましたので無断勝手ですが、転載させていただき、その当時の学生剣道の気風、流れをいささかでも回想でき参考になれば幸甚に思います。

〔評〕　全般に昨秋の中国五県大会から格段の進歩が見られ、充実した試合内容とともに選手全体に気力がみなぎっていたのは頼もしかった。なかでも地元鳥大の進歩は目ざましく、昨秋の中国大会での優勝経験が見事に生かされたものといえよう。

技術的には各選手とも剣が軽くここ一発のきめ手に不足しており、これが残心を忘れるという結果を招いたのは残念だった。それと同時に飛込み

の間合いが遠く、突いて踏み込む必殺わざが見られず、引上げ面できめる場合が多かったのはいささかさびしい。

ともあれ最後まで試合を捨てぬ学生剣道のまじめさを示した試合内容は文句なしによかった。鳥大、松山商大、山口大の試合マナーの正しさとともに今大会を飾るものだった。（重光）

貴連盟発足四〇周年記念誌の発刊に当たり、近く八四歳の誕生日を迎えることのできる小輩に、光栄にも拙筆の機会をお与え下さったことに深謝し、学生剣道界発展のために多年寄与尽力されている貴連盟の益々のご伸展とご活躍を遥かに衷心より祈念して擱筆とします。

ひとつの試み

昭和四四年学生幹事長
広島大学剣道部OB
森　正典

私が広島大学に入学し剣道部に入部したのは、昭和四一年四月でありました。運良く一回生の夏ごろから試合に出る機会を得ていました。試合は、どの大会も各大学剣道部が持ち回りで開催しており、審判も開催地の連盟にお願いしているという状況でした。

その当時の中四国学生剣道連盟（以下学連という）加盟校は一九校（全部員数約五〇〇人）で、部員数でみると当時の国士館大学剣道部とほぼ同数でした。加盟各校の剣道の力量は低く、客観的にみると学連全体の底上げが焦眉の急務であり、故大森玄伯先生にも剣道修練、大会運営等を通じての学生の剣道の実力向上に御尽力いただいていたところでありました。

学生の間には、試合の勝敗において大会の開催地が有利との声もあって、これを是正しつつ大会運営の面から実力向上をはかるにはどのようにすればよいかを、学連の学生役員の間で検討し始めたのですが、それは私の先代の古都和彦（ふるいち・かずひこ　広島大学）幹事長の頃で、私が中四国学連の幹事であった昭和四三年六月でした。当時の習わしで私は次期幹事長となることが決まっておりましたから、橋本與志・進藤幹雄（いずれも広島大学）の二人のスタッフをいただき、古都幹事長の下で作業を開始し、松山商科大学（現在の松山大学）佐伯幹事等各大学の幹事と緊密に連絡を取り合って検討を開始したのです。

方策として浮かんだのが「大会の固定化」と「審判の登録制の実施」でした。試合の公正さを実現することが目的のひとつであったのと同時に、各加盟校の所在する地元の県剣道連盟との結び付きを強化し、各県剣道連盟の先生方に学生剣道への理解と指導をお願いしたいという目的も持っておりました。

私達学生役員の間で考えて、実現の可能性と大会固定の候補地選定のための資料を集め、大森先生に御相談申し上げたところ、学生の案をお誉めいただき大筋において御了承いただいたのです。しかしながら、「審判の登録制」については「各県の先生方にそこまで甘えることができるだろうか」という危惧を大森先生が持たれ、検討をした結果「全国の大学剣道部のOBにあたる先生方にお願いするのなら、後輩育成のために御尽力いただけるであろう」という結論に至ったのです。

その年の八月、広島大学学生会館で学連の幹事会を開催し、各加盟校それぞれの思惑や不安の交錯する中で大会運営要綱等の関係規程を決議した訳です。

その骨子は、

○　中四国学生剣道選手権大会（個人戦）と同優勝大会（団体戦）をそれぞれ松山、広島に固定する。

○　各大学毎に定められた人数の審判を各大学が推薦登録しプールしておき、大会毎に学連が審判を指名する。

というもので、外にも試合の中に三チームによる予選リーグを取り入れ、勝者のチームの実力を正確に測定するとともに、参加チームに一試合でも多く試合をしてもらうこととしたのです。

翌昭和四四年になって、各加盟校の協力を得て、私が幹事長として春の選手権大会と秋の優勝大会を実行することができたのです。それがベースとなって現在まで引き継がれてきているようです。

必ずしも万全というわけではありませんが、現在の大会の繁栄ぶりをみると、今になって当時の不安が拭い取られるような気持ちです。もっとも陰にひなたに学生を導いてくださった大森先生の存在に今更ながら感謝申し上げている次第です。

思い起こせば、この大会運営方式の改革期の広島大学は、全国的に波及していた七〇年安保闘争の渦中にあり、正門はいかめしくバリケード封鎖されておりました。あの昭和四四年八月一六日の封鎖解除の当日までの間は、キャンパスには独特の字体の立

女子大会を開く

昭和51年女子幹事長
広島大学剣道部OG
船木　淳子

第２回女子優勝大会で優勝した広島大学チーム。前列、左から２人目が私、３人目が室本(旧姓羽田野)さん。

看板が立ち並び、ホッパースタイルが行き交い、ヘルメット姿の学生が特有の抑揚をつけてマイクでがなり立て、日々の授業もままならない時勢だったのです。大会改革に燃えた各加盟校幹事も大同小異の時代の中に置かれていたのでしょう。

もう、すっかり忘れていました。「いろいろありました」のいろいろを。四〇周年の丁度半分、中四国学生剣道連盟二〇周年記念大会で、学生女子剣道人の一つの夢が叶えられました。それが、全国で初めて実施された「女子団体戦」でした。中四国連盟は、まさに先駆けだったのです。そう、そこまでは、思い出の一ページに輝かしく刻み込まれているのですが、では、どんないろいろがあったのかということになると……。

当時、女子幹事長として、この夢の実現に奔走された室本（旧姓羽田野）先輩と、互いの記憶のかけらを紡ぎ合わせ、やっと少しずつ二〇年前の様子が甦ってきました。

女子も団体戦をしようという気運は、全国的に盛り上がっていたそうです。中四国連盟の佐伯幹事長から、その実現の任を託されて、羽田野さんは東奔西走、全国幹事会に出席すべくとびまわっておられました。夜行で東京に行き、武道館で会議の後、また広島にとんぼ返りするなど、新幹線が広島まで届いていなかった頃のお話です。

みんな団体戦を望んでいる、でも環境が十分に整っておらず、全国大会実施は困難。そんな状況の中で、「今はオープン戦になってもいい、中四国連盟だけでもやってみよう」と、当時の役員の方々の奮闘が始まりました。

五人戦ではメンバーが足りない大学があります。できるだけ参加校を確保しようと、三人戦でスタートすることになりました。全員で二人だけれど出ますとか、一人なので他校のメンバーとして出ますとか、みんな、どうしても参加したい、成功させたいという気持ちに突き動かされていたのです。

会場や審判の先生方の手配は、男子と同時開催なので、さほど問題はなかったそうですが、時間のやりくり、人配等、連盟の役員、先生方、男子部員、みなさんの理解と温かい協力がなければ、とても実現できなかったはずです。その広い心に感謝しています。

大会準備に忙殺され、稽古はほとんどできないまま、試合の日を迎えました。当日も運営に走りまわっていて、試合直前に白いブラウスから剣道着に早変わりして竹刀を握り、蹲踞、礼、たちまち役員に戻る……と、慌ただしさだけが印象に残った第一回大会は、とにもかくにも無事終わりました。私自身、団体戦の醍醐味を本当に味わうためには、次の大会まで待たなければなりませんでした。

これらの日々が、現在の中四国連盟発展の歴史に繋がっていることを、四〇周年を迎えた今、しみじみとうれしく思っています。

楽しかったあの時

昭和五四年学生幹事長
広島大学剣道部OB
村井　慎治

中四国学生剣道連盟、発足四〇年を心よりお慶び申し上げます。

私は昭和五四年に幹事長をさせていただきました。その前年の昭和五三年には、幹事長広島大の住友さん、副幹事長松山商大の菅さんで、地方では初の全国大会、「第七回全日本学生地域対抗剣道大会」が開催されました。昭和五二年には、全国大会で松

山商科大学の大城戸さんが優勝されたこともあり、中四国連盟が全国に注目された時期でもありました。隅田会長、植田先生、大森先生に、大変ご助力をいただき、一七年過ぎてもいまだに頭の下がる思いでいっぱいでございます。

初の全国大会ということもあり、文部省、広島県、広島市への後援依頼をどのようにすればいいのか、全国の先生方をどのようにお迎えすればいいのか、お金はいくら集めればいいのか、不安がいっぱいでした。全日本学生剣道連盟、東海学生剣道連盟には大変ご協力いただいたことを思い出します。

また、アメリカのサンノゼ大学も特別参加し、国際大会となって、前日のパーティーでは英語が飛び交っていました。

会計の梶田君は、アタッシュケースに二〇〇万の札束を入れて走り回っていました。松山商大の高津、修道大の道原、近大の石井、岡大の大熊、広島経済大の福田、広島工大の高原、広島電機大の中田兄弟、広島大の小辻ら各幹事が、手足のように働いてくれ、またどの大学の人もよく動いてくれました。

今思えば、このメンバーで今会社をつくれば間違いなく成功するでしょう。

大会前日、ホテルの隣の部屋で他の連盟の先生方の「地方の連盟にしては、よくやっている」との会話が聞こえ、救われる思いがしました。

大会の結果は、男女とも関東連盟の優勝でしたが、男子で中四国連盟が三位に入る健闘をいたしました。

その夜、各連盟の幹事長が残ってくれ、中四国の役員と懇親会を行ないました。翌日、梶田君のアタッシュケースは、空っぽでした。

振り返ればこの時が、人生で一番生き生きとして楽しかったなあと思っております。

今後益々のご繁栄をお祈り申し上げます。

めぐりあわせ

昭和五九年学生幹事長
広島大学剣道部OB
土肥　健二

剣道の大会は、試合をする者だけでなく、審判をする先輩方、計時・記録をする学生役員、本部席に座る先生方など、多くの人間が集合し、初めて成立します。そして遠方から人が集まるなら宿が必要であり、運営資金が限られているなら広告料が必要となり、多くのルールや申し合わせを確認するためには会議が必要となります。つまり、試合者が真剣な勝負をする舞台を設定するためには、多くの人、お金、場所、そして時間を欠くことはできないのです。

昭和五九年、第三一回中四国大会の時、私は幹事長として、身をもって大会運営の難しさ、そして無事終了したときの喜びと虚脱感を味わいました。当時連盟幹事として西村秀樹君、会計として中村新一君の両後輩がおり、三人で夏の暑さの中、多くの人に頭を下げ、気を遣い、胃を悪くしながら、この大会に向けての準備を進めました。家に帰れば各大学や宿泊業者からの問い合わせの電話がジャンジャン鳴り響き、夢の中まで広告の事や印刷締切の件が登場してくる有様で、「なぜ自分だけこんなことで苦しんでいるのだろう」と自問したことも一度ではありませんでした。そして日頃のウサを晴らすべく、先の三人で無茶な飲み方をし、翌日二日酔いのままあいさつ回りにうかがったこともありました。

あれから一〇年、今にして思えば我々の仕事には、「学生なんだから」という甘えからくるミスも多く、もっと要領良くできたことに気付きます。そんなミスや失敗の多い我々でも、何とか無事に大会を終了する事ができたのは、連盟にかかわってこられた植田先生や大森先生をはじめとする多くの先生方、連盟の伝統を苦労しながらも守り、発展させてこられた多くの先輩方の、暖かい援助や助言・御指導があればこそのものであったということです。

一〇年前、大会の終わった日の晩、試合の打ち上げの席で、大森先生は、「オッ、オッ、土肥君、大役、御苦労さんじゃったな」と声をかけてくださいました。

私達とともに企業へのあいさつ回りや、宿泊業者への交渉にかかわり、審判員やその他多くの事でもっと大変であったはずの大森先生に、そんなありがたい言葉をかけていただき、私は涙を止めることはできませんでした。あの時の感動を糧として、私自身、中四国連盟へ何か恩返しをする時期にきているのだろうかと、この原稿依頼を受けてふと感じる今日この頃です。

そんな私は現在高校の教員として剣道にかかわっており、高体連の仕事の一部を微力ながらお手伝いさせていただいております。県大会の際には、何と一〇年前の姿そのままに、本部席で記録の整理などを担当している私、巡り合わせが良いのやら悪いのやら……。

われ剣道を愛す

無限の可能性

松山大学剣道部OB会会長
吉岡　真吾

松山商工当時、昭和15年の天覧試合
府県戦戦士の部で３位

この度、中四国学生剣道連盟におかれましては、創立四〇周年を迎えられ誠にお目出度うございます。心からお祝いを申し上げます。

初代会長津田誠次先生を始め各会長、各副会長、幹事長並びに顧問の先生方の並々ならぬ御苦労御努力の賜物であり、関係者の皆様におかれましては感慨無量の思いであろうと拝察いたします。

過去四〇年を振り返ってみますと、昭和三〇年に中四国学生剣道連盟が発足した事になります。その当時の日本はアメリカの支配下からやっと解放されましたが、日本の将来について何一つとして明るい見透しはつかなかった、そして衣食住の不安な苦しい毎日ではなかったかと存じます。

こうした一番苦しい時に連盟を発足された事に心から敬意を表わしたいと存じます。

その当時松山においては神社の境内とかお寺の一角を借り、恐る恐る剣道の練習をしたりしたものでした。ＧＨＱから剣道の許可がおりますと、松山市二番町の繁華街で経営者の好意により剣道の大会を持ち、剣道のできる事を歓びあったものでした。

その後もＧＨＱの影響もあってか全国的な盛り上がりがなかった事も事実であります。いろいろな悪影響が、今日まで糸を引いているのではないでしょうか。

世界の何処にもない日本精神の魂と申しましょうか、剣道魂が失われつつある事は誠に残念でなりません。又剣道を学ぶ若い人達が減少しつつある事は誠に憂慮に耐えない次第であります。戦後疲労困憊しつづけてきた日本経済が今や世界の最先端まで発展した事は大いに感謝し歓迎すべきことであります。

甲子園の高校野球を始めプロ野球、そしてサッカー、秋になればラグビーが始まります。その妙技は観客を酔わせ人の心を魅了していますが、その本質は球投げ、球打ち、球蹴りにすぎません。ここには剣道の究極とする「永遠の生命を得るための悟道」は見受けられませんし、また哲学宗教的深みもありません。

野球、サッカー、ラグビー等は日本が生み育てて来たスポーツではありませんし、皆外国からの輸入であります。であれば、日本剣道も外国へ輸出できないはずはないと思います。

私が昭和九年ペルー国の首府リマ市に行く船上にて、丁度リマ市の領事が同船されており、加えて船員に三～四人剣道経験者がおられたので、船長からも要請され、船上で大勢の船客の集まりの中で剣道をお見せし、大変喜んで貰った事を記憶しております。

日本剣道発展への一策として、幸い日本剣道連盟

は日本体育協会の加盟団体であります。従ってスポーツの領域にある剣道についても、オリンピック参加への実現を目指していただければ、剣道発展への大きな足掛かりになるのでないだろうかと愚考いたしております。日本剣道連盟の諸先生方に御一考戴ければ誠に幸せに存じております。日本剣道精神が一日も早く芽ばえ栄える事を乞い願っている次第であります。

日本の国技である柔道は戦後日本の山下選手を始め優秀選手が諸外国に派遣され、柔道の普及に努め今や外国の柔道は日本の柔道に追い付き追い越そうとしている状況を見るにつけ、日本剣道も外国で普及を計り剣道が一日も早く全世界に顔を出す努力も剣道発展への欠かせない道ではないかと存じております。

富士山には頂上がありますが、努力には頂上はなく、無限の可能性に挑戦することこそ剣道発展への近道ではないかと存ずる次第であります。剣道は幼少より老年に至るまで防具をつけ、老若男女を問わず汗を流す事ができる最適の人生の修養の場でもあります。

私が剣道を始めた動機は尋常高等小学六年生の時でした。ある時、一年上の高等一年の方に剣道の防具をつけさせられ、散々叩きのめされました。家に帰り、私の部屋で、痛いしくやしくてたまらないので泣いていました。母が来て問いつめられしぶしぶ話をしたところ、母は〝何も泣くことないじゃないか、剣道をして仕返しをしなさい〟と言って、翌朝早速竹刀を買って来て励ましてくれました。

彼は高等一年で岡山県立津山中学に、私は六年から同学校に入学し、同じように剣道部に入部いたしました。一年二学期後半からはほとんど負けなしの試合ができるようになりました。津山中学で二年生からレギュラーになり、全国・地方の試合を問わず好成績を残す事ができました。

松山高商に入学し、多くの試合に臨んで来ましたが、負けた時は本当にくやしくて、何故あんな負け方をしたのかと、反省に多くの時間を費やし、次の試合に同じ愚を繰り返さないよう努めて来ました。反省こそ次の勝利に大きく役立つ事も事実であります。

今日私の剣歴を反省しますとき、剣道を始めた動機は高等一年の先輩が私を叩きのめしてくれたこと、又剣道で叩きのめされたら剣道で仕返しをしなさいと言って翌日竹刀を買ってくれた母の良き指導の二つです。

この二人が私の心からの指導者である事に感謝の誠を捧げたい気持ちで一杯であります。

私の事でつまらないことを長々と申し述べましたが、これも学生の皆さんに何かのお役に立てればと思う一念からです。御無礼を御容赦くだされば幸せです。

最後に、中四国学生剣道連盟四〇年に当たり関係者の皆様、特に学生諸君にお願いいたしたい事があります。

それは、世界の何処にもない日本を象徴する日本剣道の現状はどうなのか、剣道をする魅力がだんだんうすれつつありはしないのか、その点を考えて、今こそ創意工夫をこらし再建の道を見つけ出してほしいということです。特に学生諸君に是非とも真剣に考えていただきたく私の心からなるお願いであります。

中四国学生剣道連盟四〇周年を大きな発展への節目として、一層意義あらしめる努力を心からお願いし、お祝いの言葉に替えさせていただきます。

友との出会い

香川大学昭和三七年卒業
天野　正士

教職三年目に、都市部の小学校に着任したのが、少年剣道とのかかわりでした。たまたま、校区に在住の剣道の先生が数名の児童の相手をしておられたので、手伝いをさせてもらっていました。

当時、児童の体力の低下が学校教育の場で問題になっていました。遊び場の不足、塾通い等が原因なのか、朝礼で少し立っていても倒れる児童が多くありました。体力づくりにと、先輩教師のすすめと協力により、剣友会という名で組織をつくりました。

時代の要求であったのか、多くの会員ができました。剣道の仲間が積極的に協力してくれたので、人気のある団体になりました。何事にも反対者はいるもので、多くの投書がありました。読んだことはありませんが。

指導にあたっては、伝統のあるものですから「我流は邪道」と考え、習った通りを伝えることに専念しました。

その後、スポーツ少年団となり、転任するごとに

真仁剣の会

岡山大学昭和三九年卒業
畠瀬　修

創設と関係して、二〇年間相手をさせていただきました。多くの友を得ました。

香川大学は、植田先生の御指導を受けております。先生からは、技術について教わったことは一度もありません。稽古の相手をしていただくことと、稽古の様子をうしろ姿で学ぶことでした。中心は、人間形成についての講話でしたから、学校教育の場で大いに役立っています。先生は、相手を師と思うようにとよく言われました。私は、先生の御指導を「宗家の指導」と言わせていただいております。

一年に一回、「真仁剣会」と称して、大阪・香川・岡山・鳥取と、時と場を気ままに変えて、当時の中四国学生剣道の仲間が一泊二日の日程で集まっています。岡山大学ＯＢの畠瀬修先生（香川医科大学教授）を会長としています。この集いには、竹刀を離して十数年になりますが、幅広い考え方を得るために、何を置いても出席しようと努めています。

剣道によって出合った「交剣知友」を感謝しています。中四国学生剣道の栄光を祈っています。

学生時代、部活動に精を出すことは若者のエネルギーに焦点を与え、人生観を深め、多と個の在り方を学ぶうえで有意義です。

なかでも『剣道』は他の種目に比してすぐれた特性を多々有しておりまして、剣道のもつ奥行きと広がりは『汲めど尽きない泉』の如くすばらしいものです。

すなわち、剣道のように少年から高齢者まで男女を問わず広く楽しめる競技は他に類を見ません。これは体力以上に『技』と『気』の要素が重視されることによると思います。

私が岡大剣道部に入部したのは、まだバンカラの気風が残る昭和三三年の春でした。桜花の下での歓迎会、夏期合宿（一〇日間）の荒稽古、各種大会での泣き笑い等々なつかしい思い出が多々あります。これら総合大学（津島地区）の剣道部における経験の他に医学部剣道部（鹿田地区）での修業がさらに多くのことを教えてくれました。合同の重要行事、合宿、遠征等をのぞき、日常の稽古は医学部道場で行なっておりました。

徹底した基本集中とテーマを決めた実戦的稽古で、西日本医科学生剣道大会（西医体）では団体準優勝二回他、まずまずの成果をあげることができました。

大学院進学、米国留学後医学部に残りましたので、稽古の機会には恵まれておりましたが、怠け病のため月一回の稽古がやっとでした。

その私の目をさましてくれたのが『真仁剣の会』の剣友でした。毎春一泊二日の稽古会を各地区持ち廻りで開催する会で、背景、職業、実力等を全く異にする、剣を愛する人々の会です。

五〇代半ばの私が週一～三回稽古ができるのも、色々工夫して剣友を驚かしてやりたいという欲心のせいでしょうか？

学生期の剣道

広島大学昭和三七年卒業
松田　憬宣

日本の剣道が伝統文化の一つであるのは、異論をそれ以上に『剣の心』にとりつかれてしまったといった方が真実に近いと思います。剣をとって気を張り相手と圧力をかけ合う局面は、人生の一刻一刻を力強く切り開く時の切所に身を置くことと同じで、すばらしいの一言につきましょう。剣の心を練ることは、即人生を練ることに通じ、心身の剣道による鍛錬は全人生の美しい創造に通ずると確信しています。

そうした努力の御陰でしょうか。私の在学中にはとうとうなし得なかった西医体での団体戦優勝（二回）と個人戦優勝（一回）を香川医科大学の剣道部諸君が私にプレゼントしてくれました。

執筆の機会を与えてくださった先生方、真仁剣の会の皆様、今は亡き師山渋保雄先生、亡母幸江（なぎなた範士）に感謝し、さらなる修業をお誓いするものです。

合　掌

またないのですが、その認識に立って現状の剣道を観ますとき、伝統文化からほど遠いことが判ります。学生期の剣道もまた例外ではあり得ないのです。その原因を確かめておくことは、学生期の学剣者にとって将来にわたる課題でありますから避け得ないことであります。

今日の状況は、敗戦以後にありますから大筋で省みますと、戦勝国は競技としての理解であり、伝統文化としての復活は認めなかった経緯がありますけれども、講和後も継続されて来ました。剣道を復活させ後世にまで残しておくには、先例にならって学校教育に採用されることが先決でありました。その結果の学校剣道は、剣道人が期待したものとは質的に異なっていたけれども存続させることに意義を求めたのでした。

学校剣道は体育の格技として、スポーツとして、競技として構成されていたのです。これの内容については剣道人はほとんど知らないといって良いほどであります。

学生期の剣道がそれまでの学校剣道の延長であるならば、大学が学問の府として機能していないことになるでしょう。学問への視点があるのならば、学生期の剣道も同様に考えてしかるべきでありましょう。そこからは、詳らかではないにしろ、伝統文化としての剣道と競技としての剣道の違いがみえてくるでありましょう。

茶道や華道、能楽等の伝統芸とのつながり、禅との関り、更に先人の事跡に思いをはせて手近に入手できる宮本武蔵の「五輪書」、柳生宗矩の「兵法家伝書」、僧沢庵の「不動智神妙録」等の世界に無関心でおれなくなるはずであります。

一方外国人からみますと、剣道は精神性の高い日本の文化であるとみられているのにもかかわらず、文化としての教育が、家庭でも学校教育でもなされていないことによる「伝統文化音痴」に陥っていることには気付かされていないのです。この状況では、外国人から剣道について尋ねられることがあっても答えられないでしょう。歴史性への無関心が日本人には通用しましても、国際的には通用しないばかりでなく、学生剣道界の恥になるといっても過言ではないのです。

学生期の剣道界がこのような状況にあるのは、現在の剣道への理解があいまいであるからに他ならないのです。

端的にいえば、伝統剣道（古流につながるものとして統合された）の事理、更に奥の心の領域にいたる修行過程からみれば、修行の一部である技術面の鍛錬の程度をはかる「試合」「仕合」（試みに合わせる。合わせ仕る）に過ぎない競技を剣道の究極の目的のように位置づけているからなのです。

国民体育大会や全国青年大会などが剣道競技の部であることからも明らかであり、全日本大会も剣道競技大会としますと種々の議論も解消されることでしょう。

つまり、伝統剣道の修行の一部でしかない「試合」を競技として、あたかも剣道の全てであるかのような錯覚のなかに、閉じこめられてしまっているからであります。

先人の事跡を求め、先人が到達していた心の領域まで思いをはせる機会は、この時期をおいてはあまりないのです。この時期に確かな種子を播いておくことが、学生剣道の充実のためにも、また各々の学剣者にとっても欠かせないことと気づくべきであります。

地方色を大切に

鳥取大学昭和四九年卒業
福井伸一郎

私が鳥取大学在学中は学生剣道連盟二〇周年の記念の年でした。その記念事業で学連ＯＢによる剣道大会が催され、深い感銘を受けたのを記憶しております。

当時は各大学ごとに剣道に特徴があり、その大学の剣風とでも呼べるものがありました。松山商科、広島、島根、山口、香川、愛媛大などが壁となっておりましたが、三年時に三位となり、あこがれの全日本出場が決まった瞬間のことを今でも覚えております。その他、春の個人選手権大会準々決勝で長栄先輩に敗れたこと、秋の優勝大会では優秀選手賞を二年続けていただいたこと、島根大との定期戦、関大、近大、国士館大との合同稽古、東京教育大の寒稽古の参加など数々の苦しく楽しい思い出がよみがえって参ります。

卒業後、教職員大会や中学・高校の大会において、中四国学生剣道連盟の諸先輩方の姿を見ると、懐かしさと同時に自分もがんばらなければとずいぶん刺

激を受けたものです。

中学生の剣道指導に携わり十数年になりますが、中国地区の中学生は、全国大会で五回の優勝を始め数多く入賞し活躍しています。しかし、わが鳥取県だけは全国大会の入賞経験もなく、中国大会においても上位に進出することができず無念な思いをしております。

強化練習会、合宿、主将講習会、県外遠征など県中体連剣道部の組織をあげて取り組んでいますが、その際、中四国学連でのつながりで、交流を深めさせていただいています。

現在、最も頭を悩ませているのは剣道人口の減少です。

小学校時代において懸命に練習した子供がそのまま中学校・高校と剣道を継続してくれればよいのですが、中途で他の運動へ変わっていく現象がみられます。

そのうえ、新たに中学校から剣道を始める生徒も少なくなりました。これは、剣道が子供たちにとって魅力あるものとなっていない現状を物語っています。

基本をきちんと押さえた中で、各年代に応じ、楽しんで剣道に取り組ませる指導の工夫が必要なのではないでしょうか。そうすることによって、少年剣道、中学校、高校、大学とつながるものになると思います。

幸い、教え子の中で中四国学生剣道連盟に所属して剣道を続けている生徒がいます。こうした生徒が少しでも多くなり、彼らが鳥取に帰り活躍してくれることを期待しております。

中四国という地方色を持った一つの剣道のつながりを大切に、さらに中四国学生剣道連盟が発展することを祈念いたします。

『道』の指導

島根大学昭和三七年卒
川上　祐司

ある人の講演の中で、茶道でも華道でも、およそ「道」とつくものは、師と弟がともに更に上を目指して努力することで成り立つと話されました。

大学卒業以来、主に中学生に部活動として剣道を指導してきましたが、その間、一貫して二つのことを心がけていました。

その一つは、基本に忠実な、きれいな剣道を目指すことです。

この事は、学生時代に島大の福田明正先生から、いつも「きれいに打たれるようになったら、上達したと思え」と言われていたことがもとになっています。私の剣道が、あまりにもこせこせした剣道だったからでしょう。

そう言われても、福田先生のような豪快な剣道にはとうとうなれませんでしたが、中学生を指導する時には、常にこのことが頭にありました。中学校に入学しての一学期間は、剣道経験者も素人も一緒に素振りを行ないます。この時、素直に基本から努力した者の伸びが良かったように思います。だから、私は卒業の時に「高校へ入ったら、中学校時代にならった剣道は忘れなさい」と言って送り出しています。高校生には、高校生に合った剣道があるはずですから。

今一つは、校則違反や悪質ないたずらをした者は、その後の最初の試合は、団体メンバーからはずすことです。これは、若い時、研修会で「武道をやっている者は、さぞかし悪いことをしないだろうと思い、ある刑務所の受刑者のスポーツ歴を調べたら、結構高いパーセントで武道経験者がいた」という話を聞いたことが頭にあったからです。

そんな子にこそ、「スポーツで自信を付けさせ、更生させるべきだ。」という考えもあると思いますが、私は一つのけじめとして、また、本人にとってもスッキリした気持ちで出直すためにも一回はずしました。

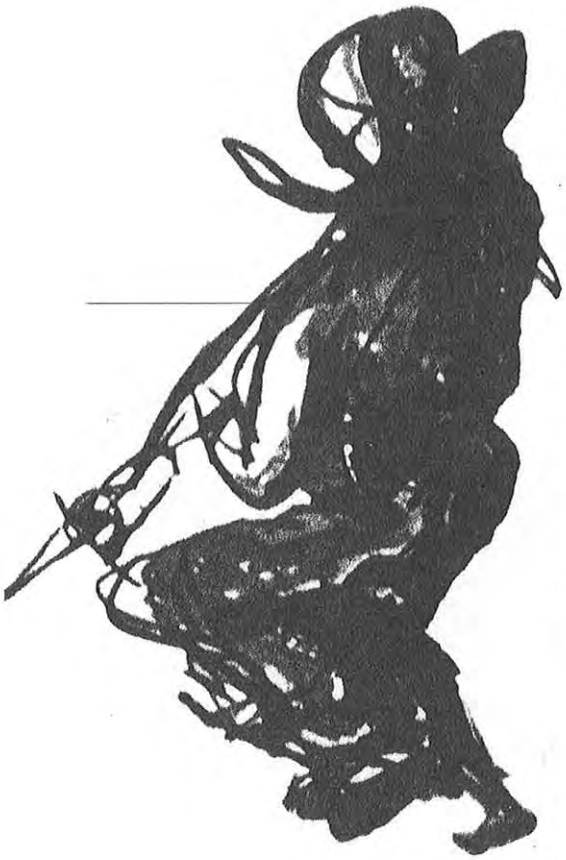
以上二つのことは、賛否両論あると思いますが、私は頑固に押し通しました。

果たして「道」を教えることができたかどうか、非常に心もとないかぎりですが、卒業しても声をかけてくれることで、私自身は、満足しています。

悔いのない人生を

徳島大学昭和四九卒
藤本　辰夫

私が剣道を始めたのは高校一年生のときでした。当時私は脆弱で運動とはおよそ縁のない世界にいました。そんな私が剣道を始めようと思ったのは、剣



道が体力の足りないところを気力でカバーできそうに思えたという、ただそれだけの理由でした。

大学時代に、わが校の新しい体育館で全日本剣道連盟主催の四国地区講習会が開催されました。そのとき全国的に有名な超一流の先生方に稽古をお願いする機会を得て、その先生方のあまりの強さに驚嘆し、剣道の奥深さを知ったのです。

大学を卒業後、会社に就職してからも剣道に対する熱は冷めやらず、行く先々で剣道場を探しては稽古に励んでいました。しかし、もう少し本格的な剣道をやりたいとの思いから、警察へ入ることにしました。

その当時、県警の剣道師範は大学でも剣道部の師範としてお世話になった堀江幸夫先生がされていて、もう一度剣道の基礎から教えていただくことになりました。警察では剣道特別練習生として五年間鍛えられ、ようやく剣道の中に何かが見えそうな気がしてきた頃に残念ながら仕事の関係で第一線に出ていくことになったのです。

特別練習生を退いてからも仕事の合間を縫って稽古に励んでいたものの、年を追う毎に稽古量が減っていきました。そうして、五年が経過し、益々剣道から遠ざかっていくことに憂慮した私は、一大決心をしてそれまで一一年間勤めた警察を退職し、小さな町道場を開くことにしました。それまでお世話になった先輩や先生方に何の恩返しもできずに職場を去ることは、大変心苦しかったのですが、年齢的にも最後の機会だと思い決断しました。

そして、剣道場を開いて早くも六年目を迎えました。長年苦しんでいた腰痛も今年二月に思い切って手術し、術後の経過も良くようやく激しい練習ができるようになりました。剣道場とは言いましても、学習塾が本業で剣道は道楽だと人は言います。

私の人生観は「悔いのない人生を送る」の一言に尽きると思います。その人生観の縦線に剣道が居座ってしまったために、仕方なく横線に仕事を入れて人生という織物を織っている次第です。

これからの後半生を剣道と共に生き、未だ見えない頂上を目指して一歩ずつ歩んで行きたいと思います。

初心者に学ぶ

高知大学昭和五七年卒
西本　憲弘

大学を卒業して一二年、今振り返れば、年月の過ぎ去ることがなんと早かったことでしょうか。春の松山、夏の広島、そして岡山での中四国の剣士と剣を交えたことが昨日のように思え、中四国の後輩の活躍を新聞、雑誌等で見るにつけ、懐かしく思い出します。

卒業後、中学校の教師として剣道部の顧問をずっと続けています。その間、多くの中学生剣士とともに練習をしてきました。

私が勤務してきた中学校は、私が思っていたよりはるかに生徒指導等の仕事が多く、部活動の練習に思いどおりに参加することができなく、もどかしさ、

情けなさなど数かぞえきれないぐらいありました。しかし、その反面剣道の持つ魅力、すばらしさを以前よりも増して強く感ずることができたと思います。面をつけ、生徒と竹刀を交えれば、自然にうまくいかない自分を忘れ、剣道の中にのめり込み、剣道のおかげで放課後のひとときがたまらないものに思えてくるようになり、心のリフレッシュには大いに役立ったと思います。

現在、剣道部の生徒は男子一三人、女子一二人で活動しています。その中でも、中学校から初めて剣道を始めたものが三人もおります。保護者には強く反対されたにもかかわらず、中学生になったら剣道を始めようと思っていたらしく、絶対に三年間努力するという約束で剣道部に入部してきました。練習には意欲的にそして、歯をくいしばりながらがんばっている姿がとても新鮮で、すがすがしい気持ちになり、うれしくなります。

自分自身を振り返れば、新しい防具をつけ気持ちも新たに剣道をがんばるという気持ちが思い出されます。

さて、自分の今の剣道ですが、先ほどの初心者の練習をしている姿から学ばなければならないことが多くあります。剣道においても技術的な基本が大切であることは言うまでもないことですが、剣道に集中する心の基本も非常に大切であることを初心者の剣士が教えてくれました。

自分の気持ちの中に、目標を持ち、新鮮な気分で剣道に取り組むことが重要であると思います。今の気持ちをこれからの私の剣道に生かしていきたいと強く感じます。

最近、剣道離れということが盛んに言われている時ですが、剣道の魅力、すばらしさを子供たちへ伝えていきたいと思います。

剣道との二〇年

広島大学昭和五九年卒
金村　明子

小さい頃からスポーツ好きだった私は、小学校六年生の時、地元の小学校で剣道教室（五剣会）が開かれる知らせを聞き、迷わず新しいことへの挑戦ということで剣道をはじめました。それ以後、中学、高校、大学と剣道部に所属し、剣道のとりこになり、とにかく、「何のために剣道をするのか」など全く考える暇もなく剣道に夢中で、教員になってからも一生続けるつもりで稽古に励んでいました。

しかし、就職、結婚、妊娠、出産、育児……はそんなに簡単なことではありませんでした。一回目の妊娠以来稽古をしなくなり、産後、時々稽古をしても体が思うように動かず、おもしろみもなく、「なぜ前はこんな稽古に夢中になっていたのかわからない」というほど剣道への思いも薄れていきました。それどころか、毎日を無事に送ることが精一杯でした。

そして今から約一年前、下の子も三歳になり、少し気持ちにゆとりが出て自分の健康を振り返ってみた時、三〇歳も過ぎ、体力も衰えてきた自分には何かスポーツでもする必要があると感じ、考えたところ、剣道が頭に浮かび、再び生徒と一緒に一から出直す気持ちで始めることにしました。

その後、剣道を生活のペースにはめ込んだ現在、私は三つの大切なものを心の支えとして、毎日を送っています。一つはもちろん家庭生活（家族の幸せ）です。これは何に代えることもできない一番大切なものです。二つめは仕事……県立高校で家庭科の教員をしていますが、授業の中で、将来自立していく生徒達に何を伝えなければならないか、時代の流れに添って考え実践していく家庭科教育の奥の深さを感じながら、楽しんで教員生活を送っています。そして三つめが剣道で、週に一～二回の稽古ですが、これは前に述べた二つのことを成し遂げていく原動力になっています。

正しい剣道を目標に掲げ、稽古をして汗を流すことで、身体的にも精神的にも何ともいえない充実感を得ることができ、明日への活力が湧き出てくるのです。剣道を始めて二〇年たった今、「私自身何のために剣道をするのか」やっと答えが出てきたように思います。故・大森先生が「生活そのものが剣道である」と言われた事を今、身にしみて感じています。

学生時代は試合に勝つために夢中になってやってきた剣道ですが、今は自分の生活のため、生きがいのため、心の栄養補給のための剣道であり、稽古が楽しくてたまりません。これから何があるかわからない人生ですが、妻として、母として、教員として、一人の人間として、剣道と共に強く生きていくことができれば幸せです。

それではここで、これまでに剣道を通してお世話になった諸先生、先輩方、また仲間に、そして私が

剣道を続けることを暖かく見守って理解してくれている家族に感謝の意を込めてお礼を言い、筆を置かせていただきます。

剣の道は人の道

山口県鴻城高校剣道部監督
石田かおり

中四国学生剣道連盟四〇周年、おめでとうございます。私は現在、高校教員、剣道部監督、主婦、二児の母という四つの顔を持つ女性です。私は八歳の時から剣道を始め、桜美林高校時代にはインターハイに三回出場し、日本体育大学時代には全日本学生選手権大会で準優勝、団体戦でも準優勝と、剣道に賭け、剣道に明け暮れた青春でした。子供の頃は勝つことが面白く、日本一になることを目指してがむしゃらに稽古をしていたように思います。それが、高校生の頃から「私が剣道から学び得た多くの感動を、子供たちにも伝えたい、味あわせたい」と思うようになり、教職を目指すようになりました。

それまでの私は「剣道はスポーツじゃない。武道だ。バスケットやサッカーのようなチャラチャラしたスポーツとは違うんだ」という変な誇りを持っていました。今思えば、大変おごった気持ちであったと思いますが、そんな剣道をしている自分に自信を持っていました。大学生になって、剣道の良い面、悪い面を色々と考えさせられ、ある意味ではスポーツと言わざるを得ないと思うようになりました。

今、実際に高校生を指導していて思うことは、全剣連の掲げる剣道の理念のとおり「剣道は人格形成の道である」ということです。高校剣道を指導する限り、試合は必要不可欠な要素です。しかし、勝ちさえすればよい、勝つことが目的、というわけではありません。勝つために最善の努力をすること、勝つことによって得られる感動、そういった経験を通して自分なりの剣道観＝人生観を持つ、即ち人格形成が目的であると思うのです。

今は現役時代のようにバリバリ稽古をしているわけではありません。また、やろうとしても二人の子供をかかえ、主婦としての仕事も山積している状態で、なかなか思うようにクラブに専念できないのが実情です。

教員として剣道に取組むのは、一つでも多くの感動体験をさせ、生徒一人一人に剣道を通して自分なりの人生観を持たせるように指導することです。主婦（母親）としての取組みは、四〇代、五〇代になっても剣道を続けていかれるように、無理をしないでできる範囲で続けていくことです。我が子は現在四歳と二歳ですが、剣道をやる、やらないは無理強いせずに、本人の選択に任せたいと思っています。また、それが私の後ろ姿を見ての我が子の評価だと受け止めたいと思います。

第2回全日本女子学生剣道優勝大会
昭和58年11月28日　決勝国士館対日体大
先鋒、次鋒戦を奪われ、早くも王手をかけられてしまった日体大は中堅の浜田（左）が上段の後藤の出ばなをとらえ、豪快なメンを先取。ようやく追撃体制に入ったかに思われたが、その後、跳び込みドウを返されてしまい、劣勢は挽回できず。
左が石田（当時浜田）かおりさん